



Title	ゾラの諸作品における出産描写の変遷II : 『生きる喜び』を中心に
Author(s)	間野, 照世
Citation	Gallia. 2009, 48, p. 61-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10433
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ゾラの諸作品における出産描写の変遷Ⅱ

——『生きる歓び』を中心に——

間野 照世

はじめに

1884年に刊行された『生きる歓び』*La Joie de Vivre*¹⁾は、『大地』(1887)が出版された翌日のフィガロ紙上において、ゾラ自身が三種類の出産を描き分けたと語った「出産三部作²⁾」の第二部にあたる作品である。ゾラの研究者である Alain Pagès、Owen Morgan 両氏が、その著『エミール・ゾラガイド³⁾』の中で「出産の様子が医学的正確さをもって最も長く書かれ、そのことが物議を醸したのはゾラの『生きる歓び』(1884)におけるルイズの出産である⁴⁾」と述べているように、ルイズの出産には『ごった煮』における出産描写よりもはるかに多くのページが割かれ⁵⁾、息を呑むほどの壮絶な出産場面が描かれている。

しかし、ルイズの出産場面は確かに衝撃的ではあるものの、『ごった煮』や「出産三部作」の第三部である『大地』に比べれば強いメッセージ性が感じられないのも事実である。というのも、例えば『ごった煮』では孤独な女中部屋でひっそりと子どもを産んだ後、仔猫のように泣く赤ん坊を新聞紙にくるみ商店街に捨てに行く女中アデルの出産を通じて、労働者の置かれた悲惨な現状を読者に訴えかけようとしたゾラの狙いは明らかであった。また、公務員の家庭で子どもを育てられる環境にありながらも、「ブルジョアは出世のためにむやみに子どもを作るべきではない」という社会通念に阻まれ、生まれてきた子どもを里子に出さなければならぬマリーの出産からは、マルサス主義に翻弄され産児制限を促すフランス社会に対するゾラの怒りが見て取れた。さらには、牛と人間の出産を同時に描き、猥褻な文学と非難された作品『大地』においても、ゾラの描いた出産が

1) 1883年11月29日から1884年2月3日にかけて *Gil Blas* 紙に掲載。『生きる歓び』の引用はすべてブレイヤッド版を使用、各引用末には題名の略号 (*JV*) とページ番号を付す。引用中の下線はすべて筆者による。 *La Joie de Vivre in Les Rougon-Macquart*, t. III, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 1967.

2) 「出産三部作」とは筆者の造語。『叢書』の第15巻『大地』が出版された翌日、1887年11月16日の *Figaro* 紙上におけるゾラの「*Je m'étais promis de tenter trois accouchements*」という発言に基づき、『ごった煮』(1882)、『生きる歓び』(1884)、『大地』(1887)を「出産三部作」とした。詳細は、拙稿「ゾラの諸作品における出産描写の変遷—『ごった煮』を中心に—」、*Gallia*, XLVII, 2007年、45-52頁を参照されたい。

3) Alain Pagès, Owen Morgan, *Guide Émile ZOLA*, Ellipses, 2002.

4) *Ibid.*, p. 381.

5) 『ごった煮』において出産を遂げる女性は三人：公務員の妻マリー、女中アデル、靴縫女。このうち出産場面が最も詳細に描かれているのはアデルで、陣痛から出産に至るまでの様子がブレイヤッド版で約4頁(第18章)に亘り描かれている。一方の『生きる歓び』におけるルイズの出産場面には、作品の第10章全体が充てられ、その描写は同版で約30頁にもほなる。

豊穡な大地とその大地によって生まれた生命への賛美であったことは明らかだ。

このように、ゾラの描く出産には必ず何らかのメッセージが含まれていたはずだ。ところが、この『生きる歓び』に関しては、ゾラが実際に医学書から学んだ出産に関する知識の豊富さと、その知識をふんだんに盛り込んで描かれた出産場面の迫力にこそ圧倒されるものの、その場面を通じてゾラが訴えかけようとするものが何なのか定かではない。そこで本稿では、『生きる歓び』における出産描写の持つ意味について検証し、果たしてゾラは単に出産場面を技術的に描くことにこだわったのか、それとも、『生きる歓び』における出産描写には『ごった煮』や『大地』を凌ぐメッセージが込められていたのかを明らかにしたい。

I. 出産描写に対する意気込み—医学書の導入—

まず、『生きる歓び』における出産描写の持つ意味について検証する前に、ゾラがこの作品の出産描写にどれほどの意気込みを持って取り組んでいたのか、作中の出産場面の描写を通じて見てみたい。

「出産三部作」の第二部『生きる歓び』において出産を遂げるという重要な役割を任されたのは、銀行家の娘ルイーゼであった。「細くて繊細で、顔は整っていないけれどもとても魅力的」(JV, p. 844)なルイーゼは、ノルマンディーの漁村に住むシャントー家の息子ラザールと結婚し妊娠する。ところが、妊娠8ヶ月目に入った頃、彼女は切迫早産となり、凄まじい痛みに襲われる。産婆に診断を仰ぐと、すでに母体から胎児の左肩が出掛かっており、もはや産婆の手には負えない危険な状態にあることが判明、直ちに元海軍医のカズノーヴが呼び出された。

診断を終えると、カズノーヴは夫のラザールを呼び、これから行う分娩とそのリスクについて、「もし胎児を転位させれば」«Si je tente la version» (JV, p. 1093)とその不確定要素を挙げながら声高に話し始めた。

[...], l'enfant sortira sans doute en bouillie. Et je crains de fatiguer la mère, elle souffre déjà depuis trop longtemps... D'autre part, l'opération césarienne assurerait la vie du petit ; mais l'état de la pauvre femme n'est pas désespéré au point que je me sente le droit de la sacrifier ainsi... C'est une question de conscience, je vous supplie de prononcer vous-mêmes. (JV, p. 1093.)

カズノーヴの見解によれば、胎児を子宮内で「転位」させるだけなら母体は助かるが、「帝王切開」の場合、母親の命は保証できないということであった。ここで興味深いのは、この「胎児の転位」や「帝王切開」という発想をゾラがどこから得たのかという点である。もちろんこの時点でゾラにはまだ子どもはおらず⁶⁾、ましてやH.Mitterandの言うように、「どの書簡にもゾラ自身が出産に立ち会った

6) ゾラが愛人ジャンヌ・ロズロと出会ったのは1888年、彼女との間に子どもを設けたのは89年、91年のことである。

ことを示す記述は見当たらない⁷⁾」のである。そのゾラが、どのようにして出産に関する情報を知り得たのであろうか。

その情報源となったのは、ゾラが『ごった煮』でアデルの出産場面を描いた時に用いたのと同じLucien Pénardの『妊婦と助産婦のための実用ガイド⁸⁾』であった⁹⁾。ゾラが出産場面を描く際、常にこの『実用ガイド』を参照していたことは、すでに研究者らによって明らかにされている。実際に、『生きる歓び』における出産描写には、明らかにこの『実用ガイド』からヒントを得たと思われる描写がいくつか見受けられる。しかし、その『実用ガイド』のどの箇所が作品に使用されているのか、『実用ガイド』とゾラの出産描写の相互性について細かく指摘した研究書は筆者の知る限りではまだない。そのため、この相互性について指摘しておくことも意味があると思われる。

そこでまず、先ほどのカズノーヴの見解、すなわち「帝王切開」が母体にリスクをもたらすという見解が、『実用ガイド』の«Opération césarienne ou gastrohystérotomie»という項目にはどのように記されているのか確かめてみよう。

La vie d'un enfant vaut bien quelque chose! mais, lorsque les relevés statistiques viennent démontrer que cette opération tue 5 femmes sur 6 dans les petites villes et les campagnes salubres, et 29 femmes sur 30 dans les grandes villes, à Paris, [...] la vie d'une femme adulte est évidemment plus précieuse que celle d'un enfant qui n'est pas encore né. [...], l'accoucheur peut et doit même disposer de la vie de l'enfant, pour éviter à la mère les immenses dangers de l'opération césarienne. (GP, p. 487.)

この記述からは、19世紀後半のフランス社会においては「帝王切開」による母親の死亡率が極めて高かったという事実だけでなく、当時の医学界では胎児よりも母体の安全が優先されていたことが窺える。そして、おそらくこの項目に目を通したであろうゾラは、医師カズノーヴに「帝王切開」ではなく「胎児の転位」による分娩を行わせるのである。

また、この同じ項目には、これまでに登場した「胎児の転位」«la version»や「帝王切開」«l'opération césarienne」、さらには、まさに先ほどのルイーズの症例と合致する「胎児が肩から現れる」という三つの要素がすべて含まれた記述も存在している。

7) «Notes et Variantes» de *La Joie de Vivre* in *Les Rougon-Macquart*, t. III, *op.cit.*, p. 1799.

8) Lucien Pénard, *Guide pratique de l'accoucheur et de la sage femme*, Paris, Librairie J.-B. Baillière et Fils, 1873.『実用ガイド』に関してはすべてこの版を使用。各引用末には題名の略号 (GP) とページ番号を記す。また、引用中の下線はすべて筆者による。

9) ゾラが『生きる歓び』の執筆にあたり参照した文献については、Nils-Olof Franzen, *Zola et la Joie de Vivre, La genèse du roman, les personnages, les idées*, Stockholm, Almqvist et Wiksell, 1958に詳しい。

Mais, quand il y a présentation de l'épaule au dessus d'un détroit supérieur rétréci à un tel degré (moins de 7 centim.) qu'il soit absolument impossible d'introduire la main dans l'utérus, pour changer la position de l'enfant, [...], c'est à l'opération césarienne qu'il faut donner la préférence, ... (GP, p. 488.)

上記引用中の下線部の、「胎児が肩から現れた場合、医師が胎児を転位させるために子宮内に手を入れるのは難しい」という表現に類似した記述は、ゾラがルイズの出産の下書きとして書いた構想段階のメモ¹⁰⁾にも見ることができる。

L'accouchement est impossible lorsque l'enfant se présente par l'épaule, avec engagement du bras dans le vagin (on voit la petite main). Il faut alors que l'accoucheur opère ce qu'on appelle la version, aille détourner l'enfant, pour le ramener par les pieds¹¹⁾.

このように、ゾラは本格的なルイズの出産描写に入る前の、このいわば「序説」の段階においてでさえ、『実用ガイド』から得た当時としては最先端の医学知識や用語を散りばめることによって、これから始まるルイズの出産をより臨場感溢れるものにするための周到な用意をしているのである。

さて、先ほどの左肩から出かかっていた胎児はまだ器官に締め付けられ出て来られないでいた。医師カズノーフは「胎児の転位」を試みるため、ラードを塗りつけた左手をゆっくりと母親の胎内に挿入した。

Il avait rattrapé le petit corps, il se hâtait de dégager les épaules, il amenait les bras l'un après l'autre pour que le volume de la tête n'en fût pas augmenté. Mais les soubresauts convulsifs de l'accouchée le gênaient, il s'arrêtait chaque fois, par crainte d'une fracture. Les deux femmes avaient beau la [Louise] maintenir de toutes leurs forces sur le lit de misère : [...].

[...] l'enfant, qui reposait au milieu des cuisses sanglantes, encore retenu au cou et comme étranglé. [...] Et il y eut quelques minutes effroyables, la malheureuse hurlait plus fort, à mesure que la tête sortait et repoussait les chairs, qui s'arrondissaient en un large anneau blanchâtre. [...] Des excréments jaillirent, l'enfant tomba dans un dernier effort, sous une pluie de sang et d'eaux sales. (JV, pp. 1099-1100.)

陣痛開始から24時間以上にも及ぶ苦闘を経てようやく誕生した赤ん坊は、青黒く息をしていなかった。そこで、すぐさま蘇生措置が施されるのであるが、ゾラ

10) ルイズの出産場面が中心に描かれている第10章の下書きとして、ゾラが「Accouchement」というタイトルの下に作成した3頁のメモ。

11) «Notes et Variantes» de *La Joie de Vivre* in *Les Rougon-Macquart*, t. III, *op.cit.*, p. 1799.

はこの赤ん坊の産後の処置についても、『実用ガイド』に倣ったと思われる描写を行っている。

まず、生まれてきた子どもが息をしていなかった場合の臍の緒の切り方に関する記述を見てみよう。

a) Mme Boulant [sage-femme], d'une main rapide, coupa et lia le cordon, après avoir laissé échapper une légère quantité de sang. (JV, p. 1100.)

b) Lorsque l'enfant est violacé, à face turgescente, la première chose à faire est de couper de suite le cordon, avant de le lier, et de laisser les artères ombilicales donner de 30 à 40 grammes de sang. Cette petite saignée fait cesser l'engorgement veineux du cerveau, du bulbe rachidien et des poumons, [...] (GP, p. 231.)

ゾラが二重下線部に見られる「瀉血」という専門的な処置法を作品に取り入れているのが窺える。

また、産後の処置の一つで、アルコールに浸した布で赤ん坊をマッサージする「frictionner」という方法についても同様である。

a) [...] ; et, à genoux, tremplant un linge dans une soucoupe pleine d'alcool, elle le frictionnait sans relâche, [...]. (JV, p. 1101.)

b) [...] _ en le frictionnant un peu rudement, particulièrement sur la région précordiale, avec une flanelle imbibée d'eau-de-vie ; [...]. (GP, p. 231.)

このように、ゾラは分娩方法を選択する第一段階から、赤ん坊に産後の処置を施す最終段階に至るまでの出産の全行程を、常にこの『実用ガイド』の記述に忠実に、丁寧かつ慎重に描いた。その結果、ルイーズの出産は時に嫌悪感を催させるほど現実味を帯びた、まさに自然主義作家ゾラの追及する文学的「素材」となり得た。ゾラの出産描写に対する意気込みの強さは、この、文学作品に医学書を導入するという新たな試みによって証明されたのではないだろうか。

II. ポーリーヌの人物像

次に、『生きる歓び』における出産描写の意味、そしてそこに込められたメッセージを読み解くためにも、その鍵を握るとされる登場人物ポーリーヌについて考えてみたい。なぜなら、そもそも最初の構想¹²⁾では、ラザールと結婚し彼の子どもを産むのはルイーズではなくこのポーリーヌとされていたからだ。では、そ

12) 構想段階における登場人物の設定の変更については、「Étude」de *La Joie de Vivre in Les Rougon-Macquart*, t. III, *op.cit.*を参照のこと。

のポーリーヌとは一体どのような人物であったのか。

ポーリーヌは、パリの中央市場を舞台とする作品『パリの胃袋』*Le Ventre de Paris* (1873) において、豚肉惣菜店の娘として登場した少女である。両親をコレラで亡くし、10歳で後見人であるシャントー家に引き取られた彼女は、健康で明るく献身的な娘へと成長し、一家の息子ラザールと婚約する。しかし、最初は好意的であったシャントー夫人も、彼女の財産が底をつき始めると、彼女を追い出し、今度は息子を銀行家の娘ルイズと結婚させようと画策する。それでもラザールとの結婚を信じ続けるポーリーヌは、夫人からの執拗ないじめに耐え、重い通風を患うシャントーを介護し、近所の貧しい子供たちへの奉仕活動に心血を注いだ。ところが、そうしているうちに信仰に深くのめり込んでしまったポーリーヌは、万人の幸福を願うあまり、婚約者をルイズに譲り渡してしまうのである。

ポーリーヌが身を引いた後、そのポーリーヌ自身の強い勧めによってラザールとルイズは結婚した。そしてルイズが妊娠し難産を迎えることは、すでに本稿の第一章で説明した通りである。実は、ルイズが命懸けの出産を遂げる際、夫のラザールもその場に立ち会っていた。しかし、彼は目の前で繰り返られるあまりにも恐ろしい光景に震え慄き、何の手助けもできずにいた。そのラザールに代わって、かつての恋敵であるルイズの出産を助け、彼女を励まし、出産後も瀕死の赤ん坊に必死で蘇生活動を行ったのは、紛れもなくこのポーリーヌであった。つまり、ルイズの出産場面の引用部分で、産褥で苦しむ悶えるルイズの脚を必死で押さえていた«*deux femmes*»とは、産婆とこのポーリーヌであり、また、出産後息をしていなかった赤ん坊にアルコールを浸した布でマッサージを施し続けた«*elle*»もまた、このポーリーヌであったのだ。

青春を謳歌すべき16歳という年齢にも拘らず、自らを犠牲にし、女性であることも捨て、ひたすら他人のために献身するポーリーヌは、まさにゾラが造型した19世紀後半の理想の女性像と言えよう。ゾラはこのポーリーヌの人物像について、最初の構想に次のように記している。

Maintenant, j'ai mon héroïne, qui est Pauline Quenu, née en 1852. Elle a donc l'âge de Nana. [...]. Si je prends Pauline pour figure centrale, elle pourra être l'opposé radical de Nana, car dans ma distribution des tempéraments elle en est le pendant contraire. Donc, si Nana se donne à tous, elle se donnera à un seul, et encore; si Nana a été lâchée dans la vie sans lien moral, sans frein religieux ou social, elle se fera des devoirs, aura une police, la religion, les convenances, etc. ; mais surtout elle apportera la vertu comme Nana a apporté le vice, un produit¹³⁾.

ナナといえば、高等娼婦となって社交界の男性を破滅させた後、自身も天然痘にかかりわずか18歳で腐り果てて死んでいく、『叢書』中最も不幸な女性である

13) *Ancien plan*, F^{os} 336-368 des Manuscrits, n° 10311.

ことは言うまでもない。ゾラがポーリーヌについて語る際、敢えてこのナナを引き合いに出すのは、二人が同じ年齢の従姉妹同士であるというだけではなく、ナナとの比較によってポーリーヌの純粋さがより引き立つからに他ならない。しかし、この引用で注目すべきは、下線部の「彼女は自らの義務を心得ている」という表現である。ゾラがポーリーヌに与えたこの義務とは一体何を指すのか。この義務について、次に考察したい。

Ⅲ. 『生きる喜び』制作の背景—ラザールとゾラ—

ゾラがポーリーヌに与えた義務、それは、この時代の若者に特有の病、すなわち「生きることは苦しく、その苦しみから逃れるためには意志を捨て諦観する他ない」というショーペンハウエルの厭世思想にとりつかれ、常に死の恐怖に怯える青年ラザールを支え励ますことであつたと思われる。なぜなら、その青年ラザールこそゾラ自身であり、当時のゾラもまた、厭世思想に捉われ救いを求めていたからだ。ゾラが厭世思想に取りつかれた背景には次のような事情があつた。

ゾラが『生きる喜び』の構想を思いついたのは、『叢書』の第9巻『ナナ』*Nana* (1880) を書き終えた1880年4月のことである。ちょうどその頃、フロベールの『感情教育』*L'Éducation sentimentale* (1869) を読み直し、フレデリック・モローのようなベシミスティックな青年を描いてみたいと感じたゾラは、次回作、すなわち『生きる喜び』でその思いを実現しようと考えていた。ところがその直後、自然主義の先駆者とも言うべき友人デュランティや、まさにその作品を手本にしようと考えていたフロベール、さらにはゾラ自身の母親エミリーと、この一年の間にゾラに近しい人々が相次いで亡くなり、ゾラは失意の底に沈んでしまう。この時の心境を、ゾラは後にゴンクールに宛てた手紙の中で次のように表現している。

Le plan de *la Joie de Vivre* a été arrêté avant celui d'*Au Bonheur des Dames*. Je l'ai laissé de côté, parce que je voulais mettre dans l'œuvre beaucoup de moi et des miens, et que, sous le coup récent de la perte de ma mère, je n'avais pas le courage de l'écrire¹⁴⁾. (Lettre du 15 décembre 1883 à Goncourt)

ゾラはこの手紙の中で、母親の死が『生きる喜び』の創作を遅らせた理由の一つであることを明らかにするとともに、下線部のように、この作品が自伝的要素の強いものであることを認めている。

それから三年が経過し、ゾラはようやく『生きる喜び』を執筆する気力を取り戻したかに見えた。ところが執筆開始から約二ヵ月後、今度は旧知であつた画家マネ (1832-1883) や、ロシア人作家ツルゲーネフ (1818-1883) の死が彼を襲う。母親の死を皮切りに、同世代の友人たちの相次ぐ死がゾラに死の恐怖をもたらしたことは想像に難くない。そしてそのことは、ゾラが『生きる喜び』のタイトル

14) Maurice le Blond, *Correspondance*, t.II, Paris, Bernouard, 1929.

候補として挙げていた次の9つの言葉¹⁵⁾からも窺い知ることができるであろう。

- a) Le repos sacré du néant / La misère du monde
- b) La vallée de larmes / L'espoir du néant / Le vieux cynique
- c) Le tourment de l'existence / La sombre mort / Le triste monde
- d) La joie de vivre

まず、a) の二つのタイトルは、ゾラが1880年に出版されたショーペンハウエルの大作『思考、箴言、断片』*Pensées, Maximes et Fragments*から引用したものであり、b) の三つに関しては、同著の翻訳者である Bourdeau の序文から借りたものとされている。いずれにせよ、d) の「生きる喜び」を除けば、ゾラがいかにこの時期、虚無感や老い、あるいは苦悩や死といった観念に苛まれていたのか、これらのタイトルを通じて窺い知ることができよう。また、最終的に選ばれた「生きる喜び」というタイトルに関しても、作品の内容がその字義通りではないことはもはや明らかだ。

ゾラは「生きる喜び」を採用した理由について、オランダ人ジャーナリストの Van Santen Kolff に宛てた手紙の中で、次のように記している。

Non, je n'ai aucun souvenir précis sur la façon dont j'ai trouvé le titre. Je sais seulement que je voulais d'abord un titre direct comme *le Mal de Vivre*, et que l'ironie de la Joie de Vivre me fit préférer ce dernier¹⁶⁾.

(Lettre du 6 mars 1889 à Van Santen Kolff)

つまり、作品『生きる喜び』は、母親の死以降、死の恐怖に捉われ続けていたゾラが自らの「生きる苦しみ」を登場人物のラザールに投影して描いた自伝であり、作品のタイトルはまさにゾラの言う「皮肉」でしかなかった。そう考えれば、ゾラが自身を慰める存在としてのポーリーヌを必要としたのも理解できよう。では、ゾラはポーリーヌを常にラザールの身近に置きながらも、なぜ彼らが結婚し、ポーリーヌが彼の子どもを産むことを認めなかったのか。次に、そのポーリーヌの役割について検証する。

Ⅳ. 聖女ポーリーヌ

明るく献身的で慈愛に満ちた聖女、それがポーリーヌである。しかし、ポーリーヌが同じく聖女を主人公とするゾラの他の作品、『夢』*Le Rêve* (1891) におけるアンジェリックや、『ルルド』*Lourdes* (1894) におけるベルナデットと趣を異にするのは、作品の至る所に聖女としての自戒の念と生身の女性としての欲望との間

15) «Étude» de *La Joie de Vivre* in *Les Rougon-Macquart*, t. III, *op.cit.*, p. 1775.

16) 下線は筆者による。R.J. Niess, «Lettres à Van Santen Kolff», *Washington University Studies, New Series, Language and Literature*, N° 16, mai 1940. (Lettres du 9 septembre 1884, du 7 juillet 1887, du 6 mars 1889).

で揺れ動くポーリーヌの心理が描き出されている点にあると思われる。そして、そうしたポーリーヌの心理を最も端的に表しているのが、作中にしばしば登場する「犠牲」や「偽善」といった言葉である。

ポーリーヌは恋敵ルイズに婚約者を譲ったことについて、自分は善い行いをしたと自負していた。しかし、彼らが結婚後ほどなくして夫婦の仲を違え、妊娠後もその修復は不可能であることを知ったポーリーヌは、「 *brusquement elle apprenait l'inutilité de son sacrifice » (JV, p. 1059)* と、彼らの結婚が自らの「犠牲」の上に成り立ったものであったにも拘わらず、今やその「犠牲」が無駄となったと感じるのである。さらに、彼女はこれまでの自分の行いを「 *la duplicité de ses tendresses. » (JV, p. 1073)* と、「偽善」であったと表現するのだ。また、ポーリーヌが実際に大きなお腹を抱えたルイズを目にした瞬間に抱く感情は、まさにこうした彼女の本音を総括するものと言えよう。

Celle-ci[Louise], en la voyant maladroite de ses mouvements, la taille épaissie sous la robe, avait pâli encore. Maintenant, elle sentait contre elle ce ventre de femme grosse, elle en avait horreur et pitié. Enfin, elle parvint à vaincre la révolte de sa jalousie, elle fit taire Lazare. (JV, p. 1075.)

かつての恋敵を前に下線部のような「憎悪」や「嫉妬心」が再燃するのは、彼女が聖女になりきれていない証拠であろう。また、ポーリーヌ自身が「犠牲」を払ったという意識を持ち、またそのことを悔いているという点において、この作品が単なる聖女物語ではないことは明らかだ。ゾラはこの聖女というヴェールに包まれたポーリーヌの真の人間性を、皮肉にもポーリーヌ自身による心境告白という形によって次のように示している。

Pauline restait par terre devant l'enfant, qu'elle n'avait pas encore regardé. Comme il était chétif ! [...] Et une dernière révolte montait en elle, sa santé protestait contre ce fils misérable que Louise donnait à Lazare. Elle baissait un regard désespéré vers ses hanches, vers son ventre de vierge qui venait de tressaillir. Dans la largeur de son flanc, aurait tenu un fils solide et fort. C'était un regret immense de son existence manquée, de son sexe de femme qui dormirait stérile. (JV, p. 1103.)

このポーリーヌの告白からは、「本当は自分の子どもであったはずだ」という彼女の底知れぬ悲しみと後悔の念が伝わってくるようだ。ポーリーヌは人々に「生きる喜び」をもたらす聖女として描かれていた。しかし、彼女自身の人生とは例えば、献身や慈愛という言葉の犠牲となり、女性としての幸福も捨てざるを得ず、とはいえ完全に捨て切れていないがために生涯に亘ってその苦しみに耐え続けなければならない、まさに「生きる苦しみ」を体現するものであった。ゾラはこの

哀れな聖女にさらに追い討ちをかけるように、今度はルイズを、子育てを放棄する身勝手な母親として描くのである。その狙いは恐らく、あれほどまでに壮絶な出産を遂げてもおお母親となることを止め、再び女性として生きることのできるルイズと、かつての恋敵が産んだ子どもをまるで「卵を孵す親鳥のような粘り強さで」(JV, p. 1109) 愛情深く育てるポーリーヌとの落差を際立たせるためであったに違いない。

しかし、先ほどの引用下線部の«dernière»という形容詞が示すように、ポーリーヌはもはやそのことを苦とは思わないはずだ。なぜなら、まさにこの瞬間から彼女は自己の欲望から解き放たれた本物の聖女となったからである。つまり、ルイズの子どもを立派に育て上げることこそが今の彼女自身の「生きる欲び」であり、それはまさに母性の目覚めでもあった。ゾラはポーリーヌから女性としての欲びをすべて奪ったが、唯一、彼女にこの母性という本能を残したのである。そのことは、生まれてきた子どもがまるでポーリーヌに育てられることを前提として生まれてきたかのように、あるいはまた、まるでポーリーヌの産んだ子であるかのように、ポールと名付けられていることが雄弁に物語っているであろう。

おわりに

ゾラが出産を遂げる人物の設定をルイズに変更したのは、聖女であるポーリーヌには血と汚物にまみれた壮絶な出産場面はふさわしくないというゾラ自身の彼女への思い入れも含めた配慮があったと考えられる。その代わりに、ゾラは「出産役」にルイズを充て、「母親役」にポーリーヌを充てるという役割分担を行った。それは、ゾラがこの作品において二つの異なるメッセージを読者に伝えようとしたからと思われる。一つ目のメッセージは、ルイズの描写を通じて、文学界においてこれまで敬遠されてきた出産を文学的「素材」として取り込み、これを巧みに描くことによって真実を描く自然主義作家の姿勢を改めて読者に示すと同時に、ゾラ自身の作家としての技量をも示そうとするもの。二つ目のメッセージは、ポーリーヌの描写を通じて母性の偉大さを示すものであった。

すなわち、冒頭に掲げた疑問、「ゾラは単に出産場面を技術的に描きただけなのか、それともこの作品には何らかのメッセージが込められていたのか」という疑問に対する答えは、いずれもその通りであったと言える。『生きる欲び』はゾラの作家としての願望を満たすと同時に、母性とは偉大なものであるというメッセージをも伝える役割をも果たした。その意味において、『生きる欲び』は「出産三部作」の第二部としての意義を十分に持つ作品と言えるのではないだろうか。

(大阪大学博士課程在学中)